

『歴史総合，世界史探究』

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前文

令和8年度の共通テストにおける歴史科目は、「歴史総合」『歴史総合，日本史探究』『歴史総合，世界史探究』の2科目・1出題範囲が用意された。そのうち、『地理総合／歴史総合／公共』の「歴史総合」第2問と『歴史総合，世界史探究』の第1問とが共通であった。よって、『歴史総合，世界史探究』においては，主に第2問以降について意見・評価を行うこととする。第1問については、『地理総合／歴史総合／公共』の「歴史総合」の項目を参照いただきたい。

以下、『歴史総合，世界史探究』の概況を示す。()内は，昨年度の数値である。

- ・受験者数：78,710名(69,273名)
- ・科目選択率：14.9%(14.6%)
- ・平均点：60.88点(66.12点)

なお，評価に当たっては，15ページに記載の8項目の観点により，総合的に検討を行った。

2 内容・範囲

(1) 評価の観点

年度・出題数 設問形式	令和8年度	
	出題数	(出題率)
主に知識・技能を評価するもの	17	(70.8 %)
主に思考・判断を評価するもの	7	(29.2 %)
合計 (うち概念的理解)	24	(100.0 %)
	6	(25.0 %)

(2) 分野別の出題数・出題率

年度・出題数 分野	令和8年度	
	出題数	(出題率)
政治史	9	(37.5 %)
社会経済史	9	(37.5 %)
文化史	3	(12.5 %)
複数分野に関わる	3	(12.5 %)
合計	24	(100.0 %)

*知識・技能を評価する問題と思考・判断を評価する問題の分類は，当外部評価分科会の判断による。

(3) 時代別の出題数・出題率

年度・出題数 時代	令和8年度	
	出題数	(出題率)
古代史	4	(16.7 %)
中世史	2	(8.3 %)
近世史	3	(12.5 %)
近代史	7	(29.2 %)
現代史	3	(12.5 %)
[うち戦後史]	1	(4.2 %)
複数時代混合	5	(20.8 %)
合計	24	(100.0 %)

(4) 地域別の出題数・出題率

年度・出題数 地域	令和8年度	
	出題数	(出題率)
西欧・北米	8	(33.3 %)
東欧・ロシア	2	(8.3 %)
東・内陸アジア	4	(16.7 %)
南・東南アジア	2	(8.3 %)
西アジア・アフリカ	3	(12.5 %)
中南米・オセアニア	1	(4.2 %)
複数地域に関わる	4	(16.7 %)
合計	24	(100.0 %)

*中世(5c～14c)，近世(15c～17c)，近代(18c～19c)，現代(20c～)を判断の目安とする。

* (1)～(4)については，「世界史探究」部分(第2問～第5問)のみ。

* 第1問については，「歴史総合」部分を参照のこと。

第1問 『地理総合／歴史総合／公共』の「歴史総合」の第2問と同じ。

第2問 法のあり方と運用をテーマにした班別学習について

問1 会話文中の空欄に入る語句と資料にみられる白居易の考えとについて，適切な組合せを選択する問題。知識・技能を問う問題。律令についての包括的知識を問う問題。

問2 唐代の官僚の特徴について、適当な文を選択する問題。知識・技能を問う問題。事実的知識の有無のみでなく、韓愈や柳宗元の思想を理解した上で資料から読み取った社会的背景の中に位置付けることで正答に至る。文化史を問う良問。

問3 文章中の空欄に入る文と下線部の状況の根拠となる図とについて、適当な組合せを選択する問題。知識・技能を問う問題。多くの受験者にとってなじみがあることが予想される図像の、使い方において工夫がみられる。

問4 中世ヨーロッパの農奴について、適当な文を選択する問題。知識・技能を問う問題。受験者にとって既知の知識を問い直させる意図はみられるが、資料の読み取りに終始してしまったのが惜まれる。ボヴェジのような例外的事象がなぜ生じたのか、資料を基に背景を考察するなどの工夫で、より良い問題になった可能性がある。

問5 パネル中の空欄に入る国名について、組合せとして正しいものを選択する問題。パネルの読み解きと地図から国名を判断する、知識・技能を問う問題。地図の使い方において工夫が見られるが、イタリアの判断材料が地図のみであるため、やや難易度が高い。

問6 生徒が作成したメモの正誤について、最も適当な文を選択する問題。知識・技能を問う問題。見学の内容をまとめるだけでなく、西洋による近代的な法とシャリーアとを対比させることで西洋中心主義を批判的に考察する問題に昇華させることができたのではないだろうか。

問7 生徒が作成したノートの空欄に入る人名と班について、組合せとして正しいものを選択する問題。資料から該当の人物を判断した上で、資料の内容を抽象化して生徒の探究事例と比較して類型化する、思考力・判断力・表現力等を問う良問。

第3問 歴史に触れるきっかけや歴史を伝える手段について

問1 図に描かれている出来事と文Ⅰ・Ⅱとについて、古いものから年代順に正しく配列されたものを選択する問題。思考力・判断力・表現力等を問う問題。フランス革命の展開を、因果関係に基づいて考察する。資料にマンガを使うなど挑戦的な問題であるが、事象間の相関が少し低いので改善の余地がある。

問2 文中の下線部に関して述べた文と空欄に入る文とについて、適当な組合せを選択する問題。知識・技能を問う問題。家父長制に対する概念的理解が求められる。生徒の会話文で情報を出し過ぎているために読み解きの問題になっており、会話文の展開が誤答をミスリードしてしまった可能性があるが、着眼点に優れた問題である。

問3 文中の下線部の具体例について、誤った文を選択する問題。知識・技能を問う問題。やや細かい事実的知識の有無が求められる。正答の素材は大項目C「諸地域の交流・再編」を具体化する素材であったので、問い方の工夫が求められる。

問4 絵画や風刺画に関連する内容について、適当な文を選択する問題。知識・技能を問う問題。

問5 グラフから読み取れる事柄とその背景として考えられる文とについて、最も適当な組合せを選択する問題。知識・技能を問う問題。五カ年計画についての包括的知識が求められる。

問6 パネルの内容について書かれたメモの正誤について、適当な文を選択する問題。知識・技能を問う問題。メモの内容をパネルからの考察にしたり、パネル内の二つの事象を連動させたりすることで、受験者の持つ知識を再構築させる問題にすることができたかもしれない。

第4問 「帝国」のあり方について

問1 文中の空欄に入る文と資料から読み取れる内容とについて、適当な組合せを選択する問題。思考力・判断力・表現力等を問う良問。インペリウムという枠組みを用いて受験者の持つローマ帝国像を再構成し、「帝国」の概念的理解を促している。

問2 「インペリウム」が直接及んだ領域に関して、資料が書かれた時代と領域を示した地図について、年代順に正しく配列されたものを選択する問題。知識・技能を問う良問。やや難易度は高いが、共和政、元首政の開始、東西分裂後の東ローマ帝国と、中間のテーマを踏まえた領域の時期設定に工夫がなされており、地図の使い方が優れている。

問3 文中の下線部について、最も適当な文を選択する問題。知識・理解を問う問題。

問4 ムガル帝国期に見られた宗教や文化に関する文の正誤について、組合せとして正しいものを選択する問題。知識・技能を問う問題。スーフイズムやウパニシャッド哲学についての包括的知識が問われているが、資料の読み取りを工夫することで概念的理解を問うことができた可能性がある。

問5 文中の空欄に入る語句と下線部の結果アメリカ合衆国が領有した場所とについて、適当な組合せを選択する問題。思考力・判断力・表現力等を問う良問。19世紀末におけるアメリカ合衆国のカリブ海政策の知識を基に、ラテンアメリカの立場性を踏まえて資料を吟味することで正答に至る。

問6 「帝国」のあり方に関して生徒がまとめたメモの正誤について、適当な文を選択する問題。思考力・判断力・表現力等を問う問題。概念的理解を問う試みがなされているが、正答を判別するまでの手順が多数であるため、難易度が高い。

第5問 「税制度と社会変容」をテーマにした班別学習について

問1 明清時代の中国における税制度の変化がもたらした社会変容に関するパネルから読み取れることやその背景について、適当な文を選択する問題。知識・技能の問題。

問2 会話文中の二つの空欄に入る語句と文とについて、組合せとして正しいものを選択する問題。知識・技能を問う問題。ティマール制の概念的理解が求められている。

問3 資料におけるリストの主張に合致する文とそれと同様の考えや背景があると推測される事例とについて、適当なものの組合せを選択する問題。思考力・判断力・表現力等を問う良問。資料2の内容を抽象化することと、事例を類型化することの二つの思考のプロセスを経て、受験者は正答に至る。

問4 資料から生徒がまとめたノート二つの空欄に入る語句について、組合せとして正しいものを選択する問題。知識・技能を問う問題。第二次世界大戦に関わる国際経済の概念的理解が求められている。

問5 モンゴル帝国がユーラシア大陸に広く影響を与えた時期の中国における税に関する探究活動に際して、参照する資料やパネル及び事例と探究活動の方針とについて、適当な文を選択する問題。思考力・判断力・表現力等を問う問題。資料や事例を抽象化して類型化することで正答に至る、大問のまとめにふさわしい良問。社会的事象の歴史的な見方・考え方を評価する問題として適している。

3 分量・程度

「歴史総合」との共通問題を含め5つの大問で小問が32問で構成されており、分量は試験時間に見合った適当なものである。資料の数やテキスト量及び、受験者が解答のためにたどるプロセスを考えると受験者にかかる時間的負荷は軽いものではなく、今年度は昨年度と比較してページ数テキスト量ともに増加している。17のように会話文の説明が詳細すぎたため結果として読み取りの問題になってしまい、家父長制概念という題材が生かせなかった問題もある。資料の読み解きや思考を促す出題に際しては、資料やテキスト量が増加しがちである。これからも解答に際し

て過剰な情報や不必要な記述はないか、徹底した精査をお願いしたい。大学入学希望者の学力を測定するものとしては、適正な難易度であった。

思考力・判断力・表現力等を問う問題において、多くの良問が見られた。[22]は、「帝国」概念の深化を促す問題であった。インペリウムという枠組みを使ってローマ帝国を問い直すことで、受験者は既知の「帝国」概念に新しい意味付けをすることとなる。受験者が共通テストを受けることによって新しい発見をできるような出題は、これからもお願いしたい。[26]は資料の持つ「立場性」に着目して「我らのアメリカ」の範囲を考察する問題であった。資料読解においては、資料の発信者がおかれた立場を考慮して読み解くことが不可欠である、読み解きと考察を高いレベルで求めた、非常に優れた問題であると評価できる。[27]は大問を総括する問題として設定され、「帝国」概念に基づき探究事例を再整理する問題であった。三つのメモのそれぞれにおいて、事例を抽象化して別個の概念を抽出する作業が求められるため、非常に難易度が高い。ベン図等の模式図を用いて共通点や相違点を描き出すことや特定の視点からの類型化など、出題方式には検討の余地がある。また、「帝国」概念に基づいて学習した受験者は、「帝国」の持つ分権的な特質に着目して構造的な理解をしている可能性もある。概念を用いることによって、受験者がどのような思考の枠組みを形成しているのかも考慮に入れた出題をお願いしたい。

知識・技能を問う問題においても良問が見られた。[10]は人物と業績との組合せに関する事実に知識を直接問うのではなく、韓愈などを想起しながら唐代の社会の文脈に即して正答を判別する。文化史を問う問題として非常に優れている。[23]は地図の使い方において工夫が見られた。領域の変遷は時代性を理解する上で非常に有効であり、大きな時代の展開を理解できているかどうかを判別できる。また、中間の題意を踏まえた時期設定も秀逸であった。[18]は『集史』で用いられた言語についての事実に知識の有無が問われているが、やや細かい知識を要求しているように思う。この題材であれば、モンゴル帝国の広範な領域に由来する文化の多様性や、地域間の交流による文化の変容など、『集史』がペルシア語で書かれている背景や理由を考察することで、「諸地域の交流・再編」という大項目のテーマにアプローチする方が望ましいのではないだろうか。事実に知識の有無を問うこと自体は悪いことではないが、出題の方式によっては誤ったメッセージになりかねないので、配慮をお願いしたい。

4 表現・形式

素材（資料）については、文字資料、地図、絵画、写真、統計資料など多岐にわたっており、よく工夫されている。特に第3問Aでは、マンガを題材にした点で目を引いた。[11]は二つの絵画から時代の特徴を読み取るという問題であり、図像の使い方が優れていた。受験者にとって馴染みのある絵画でも、タイトルや作者の事実に知識にとどまらない問い方を工夫することで、新たな使い方が可能となる好例である。一方、同様に図像資料を用いた問題でも、[19]は絵画資料の特徴を十分に生かした問題とは言い難い。今後とも、資料の活用について新しい方法の開発をお願いしたい。

全ての大問が、授業や探究など生徒の実際の学びの場面を想定したものとなっていた。会話文やパネルなど、問題の中で設定されている諸資料は問題を解く上で必要な情報が含まれており、小問との関連性が高かった。

第4問は大問全体の問題構成として非常に優れていた。「帝国」を視点として、古代から現代に至る様々な地域の多様な「帝国」のあり方を示すことで、受験者が大問の学びを通して「帝国」概念を再考し新しい視座を獲得できる構成になっていた。学習指導要領においては、歴史総合が近現代の歴史の変化に関わる諸事象を学ぶのに対し、世界史探究は世界の歴史の大きな枠組みと

展開に関する諸事象を学ぶ科目であると位置付けられている。第4問のように，時代や地域を通貫する概念を設定して歴史を考察することは，世界史探究の科目の目標に合致したものと考えられる。受験者にとって新しい発見につながるような，概念に基づく問題構成をこれからもお願いしたい。第3問Aは，中間の展開においても優れていた。問1においてフランス革命の展開を確認した上で，問2において，フランス革命の成果をジェンダーの視点から批判的に考察する。近代化について多面的に考察する視点を与えてくれる良問である。

5 まとめ（総括的な評価）

本試験『歴史総合，世界史探究』においては，資料やリード文を読み取った上で知識を用いて考察する出題や，概念に基づいて考察することで既知の知識に新しい意味付けをする出題がみられ，世界史探究という科目の特性に合わせた問題を出題しようという明確な意図がみられた。リード文をはじめとする資料の読み解きや活用に特に力点が置かれていた。大問ごとに授業を想定した大きなテーマが設定されていたり，中間ごとに生徒の学びの場が設定されたりしており，中間同士や小問同士が相互に関連しながら出題された良問であった。

大問ごとのテーマを見てみると，枠組みの幅にばらつきがあることが分かる。現場での授業づくりを考えると，第4問のように地域や時代を通貫して歴史像を再構成するような概念を設定することは理想的に思えるが，必ずしもその必要があると限らないし，大問ごとの枠組みに幅があるのは当然だと考える。一方で，余りにも抽象度が高すぎたり枠組みが大きすぎたりするテーマだと，大問としてのまとまりを欠いてしまうことも考えられる。望ましいテーマ設定について，今後とも検討をお願いしたい。

世界史探究における大項目の構成は，A「世界史へのまなざし」，B「諸地域の歴史的特質の形成」，C「諸地域の交流・再編」，D「諸地域の結合・変容」，E「地球世界の課題」となっており，歴史学で用いられている古代，中世などの時代区分とは異なっている。18の評価でも触れたが，大項目で描かれた世界史探究固有の枠組みに深くアプローチする問題を今後期待したい。

毎年受験者が異なるので一括りにすることはできないが，今年度は昨年度に比較して平均点が5.24点下がり，昨年度と比べて『歴史総合，日本史探究』選択者との平均点差が縮小した。大学入学希望者の学力を測るためのテストであるので，科目間の平均点が均衡しているのが望ましいのは当然であるが，平均点を揃えることが目的となり，細かい知識の有無を問うような問題が増加してしまっただけでは本末転倒である。難易度の指標として平均点が重要であることは前提とした上で，年度ごとに受験者層が異なることも加味した上での良質な問題の作題をお願いしたい。

『歴史総合，世界史探究』が共通テストに導入されて2年目。まだまだ現場でも手探りの状態が続く中で，『歴史総合，世界史探究』の理念を具現化した問題の作成においては，大きな苦勞を伴うものであったと想像される。センター試験から旧課程での共通テスト，現行課程での共通テストと大きな変化が求められている中，歴史教育のあり方に一定の方向性を示すことが出来たのではないだろうか。ご尽力いただいた作問委員の皆様に感謝申し上げ，これからも歴史教育のあるべきあり方に対するメッセージが込められた良問をお願いしたい。